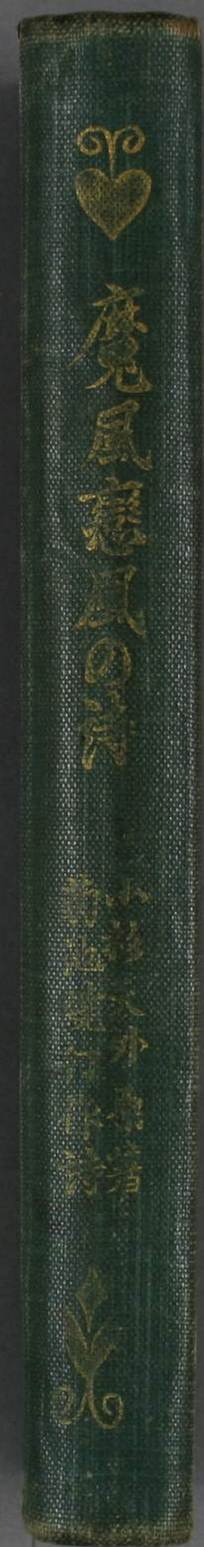
魔風惡風の清

一


魔風惡風の巻
小栗虫太郎著

中川秋声

ISSEIDO
東京 神田 誠言

序

詩材は必ず自然界に採らざる可からず、これを我が製作術の第一則となす。今や曉汀君新に韻文を以て我が蓄作を叙述せんとす、我に於ては聊か異とする所なり。蠶兒は桑葉を食みて能く絹糸を吐く、一派の詬罵を博したる我が作も、君が詩腸を經ては爰に麗章佳句と化す可き耶、我は更に君が奇才に驚くものなり。

明治丙午神無月

如是庵天外

月は月波のいただきに
山のかなたも照りぬべし
常陸鹿島のわたつみに
海の眞珠も照りぬべし。

山にありては山彦の
音はおぼろに響くなれ
海にありては千萬の
海の音こそ聞くもえん。

花は涅槃の雲もあれ
雲にたなびく花もあれ
かぎり知られぬさいはひの
深き泉は湧きぬべし。

寛風戀風の詩のおはりに
樺太島西海岸にて

野口雨情

自序

予は茲に小杉天外氏の傑作小説魔風戀風を詩材とし「長詩魔風戀風」を著はす。原著一度出て、世の青年男女を戀の美酒に昏醉せしめたるも予は元より詩才に乏しく到底原作の意を充分に飜詩するを得ず原作者に罪を負ふ事の多大なるを思ふ

明治丙午神無月

牛込辨天町僑居に於て

紫水樓曉汀

目次

一　緑の紅……一
二　病の床……六
三　その宿……一一
四　人の惠み……二二
五　友情……四二
六　待ち人……五五
七　殿井の胸……七六
八　同胞……八五

九　奉公先……九〇
一〇　依頼心……九六
一一　あらそひ……一〇六
一二　子爵家……一一〇
一三　大決斷……一二二
一四　再度の病……一三八
一五　侮辱……一四七
一六　をりあひ……一五四
一七　自炊……一六六
一八　義理……一七五
一九　露現……一八一
二〇　まよひ……一八五
二一　戀がたり……二〇一
二二　隱れ家……二〇九
二三　家出……二二二
二四　惡夢……二三〇
二五　立聞……二九三
二六　怨恨……二四二

二七 策略……二四六
二八 出發……二五一
二九 卒倒……二五六
三〇 手と手……二五九

魔風戀風之詩目次終

魔風戀風之詩

小杉天外原著
菊池曉汀作詩

一 緑の虹

春の御神の天降りして
惠は人の世に滿ちぬ
梅や櫻は美しの
日和長閑に晴れ渡り

みなみの風ぞあたゝかき
創立十週年の紀念日と
女子學院の祝賀式
こゝ綠の虹の湧きしかと
おぼゆるばかりうるはしう
建し大綠門の色ぞこき。

日の大旗は朝を今
風に靡びきてひらひらひら
數しも知れぬ提灯は

紅あざやかに校門の
外うつくしう裝飾ひぬ
祝賀の式に畏くも
國母陛下や皇族の
御臨幸ありとて道もせに
群れ居る人の動搖は
潮をよせしごとくなる
道路にならびし女生徒や
近邊りの小學生

錦の幕を張りしごと
みちせまき迄整列し
謹みなしてまちはべる。
やがて並み居る人々の
眼かゞやき一樣に
視線は彼方に張られたり

今や御臨幸とさゝやきて
背後の人は爪たてぬ
鈴の音たかう響かして

式の刻に遲れじと
疾く走り來し花姿
綾の衣をば靡びかして
風に流るゝ白リボン
羞かしげにも幾萬の
視線を受けて走り行く
彼方より來し二人つれ
道を避けんの遑なく
婀娜や少女は倒れたり。

二　病の床

こゝ大學の病院の
寢臺に身をば横たへて
痛手に惱む病人は
昨日倒れて傷負ひし
名をば萩原初野てふ
此方に俯向く優少女
名をば夏本芳江とて

平素に親しき友がらの
傷うけたりと傳へきゝ
見まはんとてや尋ね來ぬ。
「初野」は衾に身を伏して
昨日に變る窶つれ樣
思へばつらやせきあぐる
涙を手巾に抑へては
千々に碎くる胸のうち
濕り勝ちなる言葉もて

『よく來ませしよ我友』と
染々言へば、優しうも

『やよ姉君よ――禍ひに
受たる傷はいかにぞや
玆しばらくに癒えむとの
看護婦の言の葉ぞ
心安けくおはしてよ』
友を思ふの色著く

情ぞげにやうれしけれ
厚き情の言の葉の
「初野」は胸に染みぐて
友の纖細手握りては
色もあせたる唇に
つよく接吻りて潸涙み

『さはれ抱けるわが希望
そもくだかれし今の身の
せん術もなきその上に

病院にながくもあらむには
如何で出費に堪へ得べき』
とばかり言ひて嘆息む。

聞し芳江は『義姉よ
そは煩ひなし玉ひそ
妾承ひいたさむに』
溢るゝ友の情かな
友の言の葉身に染みて
いとゝ亂るゝ胸のうち。

三　その宿

町のはづれの駒込は
「初野」が下宿島井とて
物さわがしき一室には
火鉢小側に優男
主婦對手に花骨牌とり
「初野」の噂とり〳〵に
話の花を咲せける

軈て入り來し下婢が
差しいだしたる郵便を
主婦は殿井に差示めし
兄なる人のみ書信よ
彼女禍ひありしにぞ

吾より出費を頼みしに
あまりつれなきみわざかな
如何に母上異へばとて
かくも情の薄きとは

富める家とぞ知る身には
尙ほ思はるゝつれなさよ。

かくてはもしやかにせん
責任來たさばいかに
斯く思ひては等閑に
うちすておかんよしやある
責任免れんの術せんと
殿井と共に外に出てぬ。

二人は共に連れ立ちて
「初野」の室に入りにけり
殿井は今更珍らかに
見渡す室の整理きつ
据ゑし机は正しうて
蒔繪の硯、インク壺

さては筆記帳や數の書籍
彼方後の書棚まで
虚飾もせざる心根や

如何に優れし少女かと
感入りては床しうも
今慕はしく思はるゝ。

彼方此方と打ち開き
目ぼしき品もあらむには
黄金に代へむ存、意にて
主婦は捜索押入に
こは痛ましう破毀つき！
「ピアス」印の自轉車を

主婦は一人點頭きて
『金に換へなば價格如何に』
『さまでせじとて術あらむ
そはあまうなる事ぞよ』と
殿井は言へどいかてかは
責任免れんの主婦には
尙も行季を紐ときて
よき綾衣もあらむかと
隈なくさがす衣の間

目敏く殿井は見出でつゝ
質の通のあらんとは
思はざりしよ露ほども
殿井は主婦に打向ひ
『こはそも如何にせしものぞ』
言へば主婦はほゝ笑みて
一月前の事なりし
妹君の家出なし
「初野」を尋ねて來し折りに

妹思ひの「初野」は
好望し品を購なはむ
料にことかき秘密やかに
己が衣をば金に替へぬ
その心根の美はしき
など語らひてあるほどに

『主婦……主婦……』と聲高に
慌たゞしくも下婢は
『初野の嬢は來ませしよ

疾く出でませ』と呼ばはりぬ
主婦聞くより狼狽きて
『何よ？歸りませると？』

ぬるうちも柄の間に
玄關口にその人の
聲は確かにきこへたり
すはと殿井もおどろきて
障子開きて出でなむの
主婦は袖を曳戻し。

『そは不可なりよ、知られては
惡き事よ』と傍なる
肱掛窓を出でませと
强ひて主婦は馳しり行く
殿井は詮方あらなくに
窓より庭に下り立ちぬ。

かくするほどに聲のして
主婦は傷める身をたすけ
いとねんごろに劬はりて

室に入らんの氣色なる。
二言三言いひはし
かくて主婦は出で行きぬ

室内寂として音もなく
病める人の苦しげの
息き微かに聞ゆのみ
殿井は息を殺してぞ
窓に近くも庭に立ち
知られまじとぞつとむなる。

四　人の恵み

洋燈の光斜にうけ
俯向き勝ちに思ひ入る
「初野」の顔を覗く如
主婦は膝を押し進め
恩恵受けよと説きにけり
「初野」は暫し默しゝが
知らざる人のみ恵みを

妾うくべき理あらじ！
枷ともならばいかにせん』
とばかり辭ふ言葉なる。
主婦は更に語を變へて
『辭ふなうけよこの恩恵
美はし潔き殿井なれば
枷などすべきことやある
そは元來「初野」が成蹟の
優れたまふに憧がれて

將來有望ある「初野」の
僅かの金に事かきて
あるはあまりに氣の毒よ
金錢で成らむのことならば
及ばず乍らつくさんと
利のためならぬ深情の
受けませ「初野」と說きにける
「初野」は主婦の言の葉を

きゝて胸をばおどらせぬ。
さまでわが名の著きかは
「初野」は密かにほゝゑみぬ
負債うけんか辭まんか
いかにすべきとうち迷ひ
胸をいたむるばかりなり
入院て十日と經たざれば
醫師の言の猶しばし
退院せんは許容まさじ

さなれ郷里なる兄上に
頼みし金の調、達のひも
ならじとばかり情なの

たよりを得てし今の身の
いかにかなして入院の
費用償なはんすべもやと
願ひて下宿にかへり來て
自轉車賣らんと計らへば
主婦はかくも說きなして

殿井の恩惠うけよとの
言葉つくして語らへど
負償返へさんすべなさに
「初野」は恩惠うけ得でや
尙も主婦にかたらひて
他に方法のあらむかと
思ひに悶ゆる胸の內
主婦もいまわ强ひかねて
『さらば他に方法せん』と

話をよそにまぎらしぬ。
「初野」は衣を更なんと
思へどきかぬ片腕とて

主婦劬はり衣服解けば
綾衣分けて匂ひ來る
白薔薇香水のゆかしさよ
艶なす肌は玉のごと
乳房、細腰、しなやかに
腰卷は紅の瀧のごと。

外面に人のありてにや
物觸りせし氣色なる
「初野」驚き衣合せ
『誰ぞ』と呼ばひて視詰めたり
されど應への聲もなし
「初野」は胸に不審しみ
さびしき顏に紅さしぬ
主婦は衣服を着せなして
息みたまへの言の葉に

室を出行き椽傳へ
燈光明かるき茶の間なる
障子ひらきて姿はいりぬ。

湯釜沸騰れる一室には
主婦殿井のさし向ひ
「初野」の噂くさ〳〵に
さゞめきなして語らひの
障子に人の影動き
はては笑聲外にもるゝ。

「初野」は一人閨に入り
眠るとすれど種々の
思ひは胸に湧き出でゝ
いとゞ眼のさゆるのみ。
暫しが程は寢返りて
現、かあらじ幻しの
境を辿りやうやうに
夜明に近く睡眠せり。
夢さま〳〵にめぐりきて

懐かし母と語らひの
あまたの金を慈恵まれて
うち喜こぶも束の間よ

贋紙幣なれば警官に
母諸共に捕はれむ
捕はれまじと逃げまどひ
駆け走りてあるほどに。
夢は破れて覺醒ぬれば
身體は汗に衣濡れて

母はゐまさじ已が室
一人身をおく閨のうち
日光はあざやかに射し入りて
障子に映る庭の木や
囀る鳥の聲きてえ
刻は十時を知らしたり

百の思ひは浮び來て
亦かき亂す苦痛の
堤をぬきしごとくにぞ

一時にあふる胸のうち
軀て入り來る下婢の
手をば借りてぞ衣服纏ひ

主婦のことを尋ぬれば
今朝本郷に行きまして
不在とこそ答ふなる
下婢の阿兼は語をつぎて
今朝大學の制帽の
若き男尋ね來ましたり

けふ病院にかへらるか
身をいたはれと語らひて
歸られたり』と聞くからに
「初野」は胸をおどらしぬ
語ふうちに格子戸を
開き主婦は歸りたり。

「金の工夫もつきしかと
きかんと急ぎ嗽ぎして
如何にときけば

『種々に力をつくせども
無効よ』の言の葉に
「初野」は寂し顔の容色。

主婦は又も恭一の
貸すと言ふなる金を得て
方法つけませと強ふるなる
かくて、取り出す紙幣の束
「初野」の前に押しやりて
返へさばよけんうけませな

今の場合を救はんの
同情なれば辭まんも
禮にあらじと言の葉を
たくみになして說きだしぬ。
「初野」は種々に煩悶ひど
されど術さへあらぬ今

さらば借らなんこの金を
言へば主婦は喜びの
顏にあふれてほゝゑみぬ

それにもまさる初野の胸
刻や過さば歸院らんに
惡からんとてすゝむなる

かくて「初野」は化粧なし
身に纏ひたる綾衣の
流行の色の種々の
目覺るばかり艶麗に
立ちし姿の美はしう
主婦今更見惚れたり。

軈て連れたち室を出で
玄關口に出ぬれば
表に人の來りけり
來にし若紳士見るからに
恭一君と主婦は言ひ
いとしとやかに招じたり

主婦は「初野」に紹介せ
『殿井の君』と知らしたり
「初野」今更羞かしみ

紅そふ顔を俯向て

『こたびの同情うけたし』と

かすかに言ひて默したり。

殿井聞からばかりの

など御言葉に及ぶべき

傷いたはれと言ひしのみ

恩惠の事は露程も

口にはせざるゆかしさの

殿井と「初野」は思ひけり。

殿井はやがてうながして

我が爲め刻を過したり

刻遲れなば惡からむ

はやゆきませと懇ろに

强ひて「初野」を玄關に

送りいだせしやさ心。

五友情

雲はちぎれて空に飛び
吹く風さへもさむけれど
春と云ふなる此頃の
さす日の影の暖かき
入院てこのかた種々に
苦勞し金圓さへも
調達たれは勇みたち

「初野」は車上心地よく
今日の樣をば己が胸
畫きて回る思かな
知さる人のかくまても
われを思ふの深情
など思ひては操返し
かくての程に聲勇ましく
廻る車の輪さへ
響たかくも走りけり。

『萩原君』と呼ばれしに
思ひに沈む顔をあげ
見れば何時しか大學の
はや正門も後なる。
呼びし主は彼方より
己車をかへしけり
一人は師なる楠田君
一人は友の三浦君。

互に顔を見合せて
「初野」は顔に紅さしぬ
軈て車をうちつらね
共に彼方に駈りゆく。
頬骨高く面痩せて
「初野」は寢臺に伏しつゝも
楠田、三浦の來訪に
語ひなしてありにけり
楠田は「初野」が成蹟の

衆に勝るを譽めなして
心盡しの見舞金
辭むを三浦も口添へて
強ひて「初野」にとらせけり。
暫しが程は三人して
四方の話しに花さかせ
何をか笑むや外目にも
いと樂しげの語ひや
楠田はやがて突と立ちて

『いかなる事のありぞとも
傷癒えざるに退院を
せさせ給ふな初野君』
とばかり言ひて扉を開き
『初野』と呼ばひて外に招き
二人は共に長廊下。
楠田は「初野」に對向ひ
『君が往居の下宿には
あしき噂もありときく

才秀れたる君なれば
よも曲事のあらざらめ
さはれ噂のたちもせば

君かみ爲のあしからん
早や轉宿られよその下宿を
心盡しの言の葉を
二言三言いひのこし
やがて三浦に別れ告げ
楠田は一人かへりけり。

心づくしの言なれど
我が身に道を守りなば
如何なる噂のありぞとも
やましき事のあるべきか
さはれかくまで潔き身に
かくなる噂たてらるは
口惜とばかり身を伏して
涙に言葉うち絶へぬ。
三浦は種々に言ひなして

『君が心の直ぐなれば
よしやいかなる噂とも
心ないためそ、君よ君

さはれ日毎に病る身の
「初野」を尋ねて夏本の
許嫁なる大學生の
東吾の君は來ますとは
疾く聞き知りてあるものを
われら二人の間柄にして

などさは隱し玉ふにや
語り玉ひてよきものを』
聞くから胸をおどらせて
「初野」は種々に言ひ解けど
結ぼれ解けぬ三浦が胸
三浦は尙も『その君は
同級の芳江君
二世と契らんその人の
軈では子爵家の

養子ともならん人なるよ』
など語りては徒らに
「初野」の胸をもやすのみ。

やがて扉をさと開き
看護婦は入り來なる
語るを聞けば已が身の
今までありし入院の
拂は何時か濟みしよと
聞きて夢かと驚きぬ。

そは何處なる何人の
心づくしの業ならめ
彼かこれかと胸いため
一人思ひを辿るのみ
不審る「初野」が振を見て
『主は誰とも知らねども
制服婆大學の君なる』と
看護婦の言の葉に
友の三浦は膝突きて

『東吾の君の深情
隱さう事のなきものを。
初野よ語れ』とほゝゑみぬ。

六 待ち人

うらゝに空は晴れたれど
昨宵の大雨痕とめて
未だ乾かざる大通
往さ來さの繁き人
頃も午砲刻なればにや
講義終へたる學生は
今大學の正門を

溢るゝごとき人の群。
此方に車夫は人毎に
みのがさじとぞ見わたして
暫し待ち居る程もなく
彼方にそれとその人や。

肩揚深き縞絣
銀杏返しの小娘と
語らひなして居たりしを
車夫は見るから駈けよりぬ

制帽つけし學生は
車夫の姿を見るからに

『何爲め來りよ……松藏よ
急ぎたる事のありてぞや』
『さなり孃樣は彼方にて
郎君の歸途を待ちはべる
來ませ』とばかりいざなひて
彼方小路に導きぬ。

『此處』よと呼ふ聲すにぞ
見れば芳江は立ち居たり
『急きたる事のありとそは
何ぞ』と東吾は尋ねたり
芳江はやさしく口ひらき
『初野の君を救はんと。
金送りしもかたくなに
辭てそをばうけまさし
いかにすべきの計ひを

君に尋ねん』の優心
『今一度を強ひまさば
初野もそをばうけまさん
さなせ』とこそは言ひなして
芳江も今は斯くせんと
東吾の言葉に從ひて
『さらばこれより彼の君の
許にまかりて強ひん』とて
車を疾くも急がしたり。

別れて已が歸途に
就かんとすれば走りいで
先刻の小娘袖とりて
『君が兄君酒に醉ひ
來まして部屋にまたれたり
かへり來まさば惡しからん
君のみためよ來まさじな
かく傳へよの叔母君が
心つくし』と語らへど

東吾の顏色は變りなく
さらばわきても歸らん』と
袖振はなし急き行きぬ。

軈て東吾は已が宿
格子開きて入るからに
主婦は袖ひき『兄君の
酒に醉ひてぞ御歸りを
先きの程より待れたり』
きゝつゝ東吾は已が室へ

部屋に待つ間もさかづきの
數に醉ひたる兄君を
東吾は笑顔にむかひては
交す言葉の優しうも
『いかにたらつをたらつねは
過させ給ふ事かや』と

誠の言の葉色に出づ
兄は待間のつれ〴〵に
書籍の中より見出せし

「初野」の手紙さし示し
『こは女の手紙と知られたり
手紙の文字の巧みなる
汝が知り人か何人や
隱事などなかれかし
もしやありせば子爵家
いひわけなさんよしもなし
身を慎しめ』の言の葉に
弟いさむる誠實かな。

かくて暫しは種々の
語ひなしてありしかど
浮かぬ色そふ顔は
何かは理由のあらんかと
常にかはれるふしぶしの
なきにしもなきそぶりにぞ
きけば『鬼なる金貸に
負債をうけて痛ましう
今その鬼に攻められて

胸やすらかぬ今の様
弟いかに術なきか
力からんに來し』とこそ。
東吾きくから安からじ
種々に思は碎けども
まゝならぬ養子のいかにせん
煩悶兄をば眼前
炎のなかに救け得で
鬼の荆鞭に任すとは

忍ばれじとは知りつゝも
救はん事の能はじな。
情こめたる一枚の
紙幣を東吾はさし出し
『餘り僅かの額なれど
うけさせてよ』と強ふるなる。

折しも障子押しひらき
入り來し人はそは誰ぞと
見ればたちちね兄上の
七日が程も歸らぬに
尋ねてこそは來ましたり
母は見るから優しくも
『こは折よくも遇ひしかな
早な家にかへられよ』
母の言の葉きゝながし
兄は座をたちさびしらの
思ひに『さらばかへらん』と
軈て出て行く後姿。

兄の東一見送りて
東吾の部屋に歸り來し
たらちね親は目を拭ひ
如何なる事のありてにや
家を他所なる東一の
そぶりにいたく胸痛め
そゞろに催す露の玉
時ならなくに袖ぬらす。
母は東吾に語ひの

今日夏本にまねりしに
かねて約せし婚禮の
汝がこの夏の卒業の
祝ぎに芳江を妻はさん
いかに東吾の心かや
聞て玉への言の葉に
汝が意中をばきかんとて
今日ぞ來ぬる』とくからに
東吾は『暫しまたれかし

我が大望のそが爲に
碎かん事のありもせん
こゝしばらく……は』と語へば
母は樣々說きなして
『如何なる理由のありぞとも
汝が今の身の辭んは
今までうけし高恩を
水泡となさん心かや』
など樣々に語れども

東吾は諾の色もなし。
母は膝をは進ませて
『汝が斯程まで辭んは
かねて噂にきゝたりし
初野とや云ふ女生徒と
わりなき約のあればなり
さなくば辭む理あらじ』と
母は涙にくるゝのみ。
軈て東吾はたらちねの

言葉に「諾」と答へたり
かくてたちちね喜びの
色をあらはしかへり行きぬ。
東吾は一人物思ひ
養家の望、母の言
なになればそも辭しか
さはれそれさへかたときの
その影さへも消えうせて
煩悶に亂す心哉。

果は海濱に逍遙の
波の音きゝて煩悶を
松の枝わたる清風に
忘れんとこそ定めたり。
旅の準備のをさ〳〵に
又浮び來る「初野」の容
硯に筆を染なして
端書に旅行を知らす文字
軈て書き終へ投函と

下宿を出ゆく夕まぐれ
灯す擔洋燈の紅に
往來賑す景色かな。
物思ひつゝさすらひの
いつか『初野』が宿の前
みやるかなたにその人の
車夫に車をとゞめさせ
はしり寄りては清聲に
入院中の種々の

厚き情を謝しにけり。
思ひがけざる事とてや
東吾は顔に紅さして
頓に言葉も澁り勝ち
默してみやる「初野」の容貌
たゝ『旅行せん』の一言を
辛くも告げて別れては
二度三度ふりかへり
美し容貌胸に畫きぬ。

七　殿井の胸

黒板塀に冠木門
殿井と書きし黝燈の
灯陰小闇き塀の内
影朦然と常盤木や
挑か櫻か枝風の
一本高く聳えたり。

往來も繁き不忍池や、

切通坂の雜踏に
吹き送られし夜の風
微かに傳ふその反響。
器具を洗ふ下婢は
今宵の客をとり〳〵に

鏡の如き臺所
噂なしつゝ戯れの
うち語らひてさゝめきぬ
近づく足音に見合して

聲とぎらしてある程に
ほゝゑみつゝも出で來しは

「初野」が下宿の島井なる
かくての程に恭一は
足音せわしく次ぎ來て
茶の間に島井伴ひて
戀ゆへ迷ふ胸の中
今宵慾望をみたさんの
あな恐しの計略かな。

二階の一室燦爛と
かゞやく額縁の油繪や
春の花彩、秋の色
室をも匂ふばかりなる。
美はし飾り眼に入らて
春芳しき綾の香の

目覺るばかりはてやかに
その裝ひの美はしき。
思ひに沈むかんばせの

人や艶とぞたとふらん。
心も潔き恭一の
厚き情の金を得て

種々に疑惑を抱きにし
今のわが身の羞かしう
など思ひては悶ひの
憂さ晴らさんと椽側に
出て見やれば春の宵
薄く霞みし夜の帳

星の光は美はしう
暫し「初野」は見惚れたり。
いかにせしかと恭一の
聲に驚き振りむけば
いつか立ち居る恭一は
身をすりよせてほゝゑみぬ。

「初野」は夜眺をたゝへつゝ
座敷に入れば恭一は
かくて已が畫室に誘ひて

數の油繪とりいだし
說き聞かせつゝ待遇ば
「初野」もいとゞ興添へて
美しかんばせ色さえぬ。

戀の力に醉にたる
恭一尙もやさしうも
「初野」が心を誘はんと
身の行末や身のふりを
問へば「初野」は躊躇ぬ

榮ある春の更闌けて
沈む夜の氣の重きかな
「初野」が胸やいかならん
戀に醉たる恭一は
已が心中を語らんの
思は胸に充ちぬ。

やをら袂を提へてぞ
思ひのたけを語らんと
寄れば「初野」は驚ろきて

提へし手をば振り切りて
驅け出せしに恭一も
闇き一室に追ひ行きぬ。

八　同　胞

島井は「初野」ひとりをば
後に殘して密やかに
家にかへれば下婢は
『初野』の君はいかにせし。
日外來ませる波子の
先刻の程より姉上の
歸りまさんを待たれたり

島井聞から驚ろきの
まだ年ゆかぬ少女子の
如何なる事のありてにや
姉をたよりて已が家を
密かに出でゝ來ませるは
深き譯のあるならん
默頭つゝも「初野」が室へ
入れば洋燈を斜にうけ
俯下がちの小娘は

夢よりさめし如くにぞ
笑顔に島井を迎へたり
島井有情尋ぬれば
『辛さに堪えゝ密かにも
家出せし』とぞ答ふなる。
縞も模樣もわかぬまて
垢つき古りし衣着けて
「初野」に似たる顏は

艶をも失しあはれさよ
波子は「初野」をたよりてぞ
來たりしものゝ「初野」に
あはゞ叱りをうけなんと
思へば涙せぐり來て
少き心を痛めけり。

いと懇ろにさとしてそ
更闌けたれば寢よかしと
島井は巳が部屋に伏しぬ。

刻久らくに表戸を
叩く音にぞ眼をさまし
下婢は誰ぞと呼ばひしに
島井は耳に口よせて
「初野」の君の我をきかは
また歸らじと答へてよ
下婢はうなづき戸を開き
見れは「初野」は姿みだし
容色さへかへて立ち居たり。

「初野」は已が部屋に入り
見れば波子は轉寢の
うれたき夢に誘かれてや
可愛き頰にゑみもらし
垢つき古し衣着けて
面痩せなせし姿見ては
いとと哀れを催して
そゝろに散や露の玉。
波子は驚き眼を張れば

「初野」は涙に呉れ居たり
波子は「初野」の手をとりて
涙ながらにかくと
家出の樣を物語る
春の永夜ぞ更け行きて
花と花とは抱き合ひ
姉妹は床に入りにけり
風なま溫き春の夜の
いかなる夢や結ぶらん。

朝うら〳〵に晴れ渡り
姉妹は語るたのしげの
いとむつまじき笑ふ聲や
昨宵の憂はしられじな。
島井は密に胸をいため
「初野」の君を殘し置き
一人歸へりし其の後の
小夜の語ひいかにぞや
さはれ吾との語らひを

厭ふ樣なるそぶりには
恭一君とうれしさの
昨宵の契りの睦みをは
未だ未通女の「初野」は
體裁あしきに羞らふと
想出せし如にぞ
島井は獨り莞爾ぬ。
かくての程に靜やかに
「初野」は障子うちひらき

島井の居室に入りにけり
二言三言語ひて
恭一君に借りし金
返へされたしと差し出せは
島井は心躍まりて
たゞに默して承諾ぬ。

されば これをも添へてよと
封じめたる玉章の
いかなる文字やかゝれしか

知るよしもなき昨宵のさま。
折しも來たる電報を
手にして初野は驚ろきぬ。

八　あらそひ

波子の家出を追ひ來にし
兄はいらたち種々に
言ひなす初野に聲高に
罵りつゝも『波は
五十圓金を盜みてぞ
密かに家を逃げ出しぬ』
『初野』は『さはれ年ゆかぬ

また小娘のいかてかく
膽太きことなし得べき
手荒き事なし玉ひぞ
靜かにわれは尋ね見ん
われに任せてたまはれ』と
情こもれる言葉なる
兄は『さらばよまかせなん
尋ね見よと』の言葉さへ
情は見えぬ强顏

「初野」はそゝろ催して
涙に袖をぬらしけり。

折しも波は使して
かへり來しをば見るからに
兄は聲をば荒らげて
『波……盜人……盜み來し
金を出せ』とさいなめば
「初野」は兄の手をさゝへ

兄も位地ある紳士なり
いかに妹といひながら
かく行す事の酷なるよ
靜まり玉への言の葉も
いかできくべき兄人は
尙罵りて聲たかし。

兄はさゝゆる姉妹をば
振りはらひてぞ荒々に
机、鏡臺、手文庫と

中をくまなく捜しけれ
波は驚き押入に
身を立ち張りて防ぐにぞ

兄はこゝぞと波子をば
彼方に倒し押入の
抽連見れば松に鶴
女摸様の紙入を
取り出してむ姉妹
二人の面前にさし示す

それと見るから驚ろきの
「初野」はよゝと泣き伏して
『いかなればそもあさましの
心もちしと』妹に
さとす心のいぢらしや
姉妹は涙にくるゝのみ
兄は『姉妹の共謀』と
いと聲高に罵しれば
「初野」は種々に言ひ解きて
波子の惡きを詫入れど

いかて問く可き兄上は
罪ゆるさじとばかりなり

かく程迄てに黄金の
貴き兄が御心が
さらばこのちいかなるも
決して學費は請はじ」とぞ
確き心に定めては
はらら涙は袖ぬらす

九　依賴心

姉の歸りを待ちつゝも
まだ新らしき文机に
書讀む「波子」は疲れてや
瞳そらせし庭の面
來にし下婢種々くに
言葉やさしくそゝのかし
島井が居間に誘ひ行く。

殿井はいとも莞爾に
土産の時計を取りいだし
かくて波子にとらせけり
少女心のうれしくも
「波子」は今更珍らかに
賞てゝやほゝと笑まひたり
殿井は言葉優しくも
「初野」と汝とは今後を
いかにかなしく過さん』と

恭一の問ひに……
『貧の道さへ絶えし身の
……とも〳〵に
「初野」は我が身とも
自炊をなさん心なり』
幽かに漏す喘息の
痩へし姿やあはれなる。
得意顔なる恭一は
汝はわが身が引受て

望む學びを得させんに
自炊は思ひ止まれよ』と
恩惠を伽に「初野」をば
尙も口說かん計略の
「波子」に强るあざましさ
少女心の只管に

かゝる計略のあらんとは
露知らぬ身のあはれなる
言はるゝ儘に辭はじに

「初野」や歸宅は語らんと
少さき心に思ひたり。
折から「初野」は歸り來ぬ

波子は「初野」の遲歸り
不審つゝも何故と
問へば「初野」は學校の
歸途借家を尋ねたり
我等姉妹に相應き
家の樣をばものかたる

「波子」は、聞くつゝいぢらしく
物思はしき浮かぬ顔色
『何なれはそもその『樣』と
「初野の言葉に『殿井の
恩惠をうけて學校に
學びの道を辿らん』と
聞くだに「初野の」怒聲
『人の恩惠をうけもせば
姉妹が自由奪はれて

後に悔ゆとも甲斐あらじ
如何に苦勞なすとても
人の恩惠はうけざらめ』
「初野」は涙に袖ぬらす
深き計略のあるぞとは
露だに知らぬ妹は
『恩惠うけんと語て
かくて姉妹は口爭の
互に涙に咽ぶのみ。

一〇 子爵家

日影かなしきゆうまぐれ「芳江」の君を訪れて導かれたるその一室芳江を待つ間も胸のうち思ひになやむ程もなく。入り來し人や芳江君『暫し見へざる君が身の

不快などもありしか』と「初野」の言葉聞かからに「暫し逢はねど一年も遇はざる程に思はる』と芳江は涙拭ひたり。學資の道を絶れしに術あらなくに相談と芳江を訪れ來にしなれ如何にすべきを言ひかねて

『相談ことの訪れ』と
力なげなる痿へ姿
『語り玉へなか程まで
日頃親しき間柄
われは義姉とも思ふなれ
君は義妹と思さじや
なになればそも秘め玉ふ
胸の煩ひ語へよ』

誠實はいろに現はれし
芳江の言葉身に染みぬ。
學資の補助を得たしとは
語るとすれと躊躇て
果は「初野」は言ひ出てぬ。
『そは波子の家出なし
妾を尋ねて來しなるに
波の跡をば兄は追ひ
僅かばかりの金故に

果は學資をたゝれたり』
來ん夏までの學資得たし……
と言はんとしてはたゆたひぬ。

かくて「初野」は不幸の
身の行末を思ひては
涙に袖をぬらすのみ
芳江も共に貰ひ泣き
義姉とも思ふその人の
かく程までに煩ふを

など默視べき術せ
煩む「初野」を慰さめて
軈て芳江はたらつねに
打ち語ひて道せんと
友を思ふのひとすぢに
行くや彼方の母の居間。

一人「初野」は客間にて
種々に思ひをめぐらして
如何に情に厚きとて

こん夏までの永月を
補けうけんは難からん
いとゞ煩ひまするのみ。

『誰ぞと思ひば「初野」君』
云ひつゝ障子押しひらき
主人子爵は來られたり。
見るから「初野」驚ろきて
座作正して挨拶しぬ。
『火の氣もうせて寒からん

彼方の居間にまねられよ
芳江も共に招かん』と
辭ゝ「初野」の手をとりぬ
「初野」も今は否みかね
樓下傳へに彼方なる
一室のうちに入りにけり。

いかに諭せど止まざるに
さらば自身遇なんの
事情きゝて補助と

「初野」待ち居る客間にと
母は彼方に行にけり
客間は寂て燈火さじ

待ち居る人のけはひせず
若や「初野」は歸しかと
不審つゝもある程に
燈火せしことのあらぬ室に
薄ら燈火細うして
誰ぞや語ふ氣色なる。

何ぞと不審る程もなく
人影うごき爭ひの
尋常ならぬ物音に
驚ろきつゝも急ぎ行きて
障子開けば風の如
主人子爵は走りいて
闇の樓下に隱れたり
見れば「初野」も髪亂れ
帶さへとけて裳裾より

もるゝ踏出の赤きかな。

荒める樣を見からに

出て行く「初野」ひきとめて。

怒の色も嚴かに

『暫し待たれよ何なれば

此室には來し』と詰りては

金を得たさに道ならぬ

行ひなして耻知らぬ

たわれ女汝と芳江との

往來するなる交情は

このゝち絶ちぬ』の荒び聲

未道姦、憤怒、悔辱

「初野」は胸もさくばかり

千々の思ひにうち伏して

よゝと涙に咽ぶのみ。

一　大決斷

今のわが身に一道の光とたのむ友訪へば父なる人のさいなみに胸は張り裂く思ひにてわれを忘れて歸りしが恥をうけしを思ひては怨恨、悲痛、憤怒

腦かき亂し口惜さに胸を劈く苦しみの抑へ難さに文机に身は戰々と震へつゝ熱き涙に咽び入る。

妹波子は傍らに「初野」の憂愁に堪えやらで咽ぶは何ぞと不審しう『何なればそも泣き玉ふ』

問ふにも籠る同胞の
熱き情は知られたり。

情愛こもれる妹の
優し言葉に答ふべき
言の葉さへも荒みかち。
平常にやさしき姉君の
今宵にかぎり言の葉も
荒みかちなる有様に

波子は少さき胸亂す
やかでは更くる永き夜の
「初野」は閨に淋しくも
眠るとすれどたかぶれる
胸に樣々描きて
眼はいとゝさゆるのみ。

明けては「初野」波の
昨宵のわが身想ひでゝ
問ふ言の葉にやさしくも

『われら二人の補助をば
來ん夏までもうけんとて
友なる君を訪へば
友なる人の父君に
あわや此の身に凌辱
うけんとせし』と語る。
かくて二人は種々に
後來をば計へど
よき策とてもあらなくに

『やよ妹よ、わが業の
卒ん夏までわが爲めに
何處なりとも奉公して……』
とばかり言ひて澁りしが
『……さわつらからめわれとても
そを思はぬにあらねども
今のわが身はいかにとも
二人の費用の道得んに
光もあらぬ闇なれば

しばしが程を忍て』と
肉身裂れんの此の思ひ
つらや涙に咽び入る。

一二　奉公先

軒に點燈の華やぎて
人足繁き大通
遠く隔れし町端れ
往來淋しき小路を
小股馳りに急ぎ行く
まだ年經ぬ少女は
初野の妹波子なる

名を呼はれしに振むけば
此方にそれと聲の主
少女頰に笑みうれしさの
言馴顔に『姉上』と
呼びて「初野」に寄り添へぬ。
『いかに妹よ馴ぬ身の
知らざる家に奉公して
さぞ辛からめ』とばかりにて
「初野」は波子を掻いよせぬ。

『否、姉上の苦心に
わがなすことのくらぶれば
などつらからめ、姉上よ……。』
互ひにかはす微笑に
花なる「初野」の顔は
月の面にさびしらに
愁の雲のいぢらしく
強ひても笑をつくれども
病痾の色は隠されず。

『やよ姉上よ醫師許
問はれしかや』と深情
誠をこめし妹の
厚き情に答ふべき
言葉も知らずうなだれぬ。
『身をいたはれよ姉上よ
如何に病むかと涙含む
問ふ言の葉の切なるに
『わづかばかりの風邪故よ

さまて心を痛むな』と
苦しみ堪ふる胸のうち。
尙かにかくと慰むる
波子の情の暖たかき。
やがて暮れゆく空の色
名殘惜さに妹は
かへる「初野」の後かけ
門に佇立み見送れば
姉は後を振りむきて

かはす面のほゝゑみや二人の影は闇に消えぬ。

かくて「初野」は種々に波子の身をば思ひつゝ歩む肩をばそとたゝき『初野の君』と呼ばれしにつと振むけば恭一は流行の縞の洋服に香ひ溢るゝ香水の

人酔はしむばかりなる。『學ばんとてや上京に如何なる事情のありぞとて奉公するとは憐れなり君は知らずや彼の家の主人は肺を病み居しにこの頃病の進みし』と「初野」聞から驚ろきの『肺を病てぞおはすとよ』

面の色も失にけり
まだ年ゆかぬ妹君
もしや感染ばいかにせん
考へたまひよ「初野」君
よしなにわれはからんに
我にまかしてたまはれ』と
何時に變らぬ優言葉。
語ひ行けば彼方をば
いと賑やかの話聲

湯歸りらしき女生徒の
二人連れ行く後姿
「初野」はもしや恭一と
語ひ行くを見られなば
あらぬ噂の種なると
遁るが如く別れてぞ
言葉かくれば女生徒は
振り返りてぞ『初野の君！』
三人面をあはしけり

一四　再度の病

此處病院の控所に
何れ病の人々は
藥とらんと待つなかに
傷々しくも痩姿
衆の視線を身にうけて
壁に近くも俯むきて
思ひに腦むあて人は

誰ぞと見れば「初野」なる。
脚氣の病得し身には
醫師命る轉地療養さへ
それよ卒業試驗も近つきて
いまのわが身に及ばじな

わが得し病恐ろしと
かねて聞き知ることなれど
醫師の言を守らんに
術さへなきにいかにせん。

今の我身をたとふれば
荒波の上の捨小舟

四邊逆巻碧海や
とりつく島の影もなし
浪のまに〳〵漂ふて
たゞ運命の手にまかせ
明日をもしれぬ宿世かな
たゞ頼らんは恭一君よ

さはれ今まで幾ぞたび
君の切なる情をば
斥けたりしわれなるに
何とて救ひを求むべき
さはれ波子の今の様
もしや感染ばいかにせん

波子の身をば恭一君に
救ひを求めなん
思ひ定めしそれさへも

何時かは消えて……。
波が身なりとわが身より
君に頼まば枷となり

戀にすさめる恭一君に
我が身まかさん義とならば
そもいかにせん……
胸は張り裂ばかりなる、
あゝ薄僥のわが身かな。
思ひはたゞに廻るのみ

『貴女よ！　先刻より呼ひたり
聲に「初野」は驚きて
見やる控所の人々は
皆歸り行き己が傍
商人らしき一人のみ
軈て藥を手になして

痳痺足を徐かにも
玄關口に出ぬれば
待居し車夫はいたはりて

静かに「初野」乗車にけり

かくて「初野」は……

殿井の恭一の方に走らせぬ。

「初野が今の倚頼には

入院科を知らぬ間に

拂ひ呉れたる無名恩人

書工殿井の恭一の二人のみ

嵐に耐へぬ百合の花

力と頼むは恭一の君よ。

さはれ「初野」は己が身の

救け得たさにあらずして

妹の身をば計らんと

それよ、これよと種々に

何時か思ひに沈みつゝ

今眼のあたり恭一の君が

門邊をたゝに走らせて

唯ある曲角をば曲らんと

すれば彼方に恭一の君も

車に乘りて來たりしよ
摩違ひさま『君』とのみ
車は益々馳り行く

一五　侮辱

制服姿勇ましく
東吾はいとも忙しげに
己が宿をば立ち出でゝ
目ざす「初野」の下宿なる
島井の門を入りかねて
行きつ戻りつ家の樣子
覗つゝもあれば露地口に

法布姿の車夫は來つ。

『初野の君は居ますか』と

問ふ言の葉にほゝゑみつ

『萩原君を知りますか……

脚氣の爲に醫師許、

『今歸られしばかりなり』

尙ほも東吾の態を見て

何故なればにやほゝゑみぬ。

かくて案内を乞ふ聲に

出して下婢暫』と

聽て主婦は出て來たり

『初野の君は病氣にて

誰れをも面會せじとこそ

聞きし東吾は立腹て

『さらば』とばかり歸り行く

如何なる譯か知らねども

我れを疎じかばかりの

侮辱などなさんとは思ひ知られぬ彼女が胸。

芳江のたより來しなるに「初野」の君を救はんの芳江、初野が間柄を調停として旅の宿より歸京しに病の爲に不會として侮辱をば受けたるよ、如何なる彼女が心かと

立腹しうも思ひつゝかへる我宿の門に邊に人待顔の車夫のさま。

己が部〳〵部にと入りぬれば いと晴れやかに着飾りて花の姿や美しう

留守を待つなる徒然を宿の主婦は待遇なして四方の話に花咲す。

かくて芳江は『初野君の今の窮境しみ救助はんにそれよ、いかに』と友の身を思ふ情熱のあふるるなる。

『あゝ美しき彼の君と胸に抱きし其の影は今にして見る厭はしや種々に心を碎きつゝ如何にかなして救んと

思ひて宿を訪問へは我を疎んじ侮辱いかになさんも人の身のわれは不關と』ばかりなる

芳江は『さはれ彼の君のさる事あると思はれずそは宿人の業ならめ』友を思ふの情には東吾の心柔らきぬ。

一六　をりあひ

露地の植込華やかに
陽日さしそふたそがれを
「初野」は東吾の下宿なる
玄關口に訪問ぬ。
聲に出來し小娘は
花なる人の艶麗さ
暫し見惚れて居たりける

『東吾の君は居ますじや……
……「初野」尋ねて來てしよと
言傳給べ』のやさ言葉。
不在さじとこそ言ひなして
尚も見惚る小娘は

何ど美はしき君なると
心のうちに思ひては
東吾の君が戀人か
如何なる用件のありてにや

訪問れ來しと不審かりぬ。

『さらば後刻參らんと

「初野は露路を出て行きぬ

暫し「初野」の噂にて

主婦、小娘さゝめきの

東吾の君や歸らんと

待つ程もなく其人の

聲は門邊に聞えたり

其聲さへも普通ならじ

醉ひし姿のよろめきて

『今歸りし』と荒け聲

手振足振危ふげに

醉ひいとふかき酒の香に

頰は紅に染りつゝ

語りいたすや種々の

友なる人に誘はれて

酒の宴を開きしと

言ふ口元も可笑げに
廻らぬ舌の澁り勝。
かくする程に玄關に

また『初野』は訪ねて來つ
東吾聞くから『初野君』
如何なる用件のあるにや
今會ん事の我が身には
さる用件なし』と小娘に
云ひて『初野』を歸さんと

すれど『妾にさる言は
云ひ得ず』とて初云ふなるに
さらば會はんと二階なる
己が室にと導きぬ。
『初野』はそれとその人に
會ふて言葉も澁り勝ち

『如何に腹立ち給ふ
三浦君より種々の
芳江が情を聞しにぞ

初めて知りし事なるに
悪くな取りそ東吾君』
とばかり云ひて俯向きて

涙に袖を濕しぬ。
『げに情なき心かな
卑しき君と知らずして
たゞ美くしき潔き
才秀れたる君なると
われは慕ひて居しなるに

操破りて殿井とや
云ふなる畫工に波子をば
依頼み我が身の學資も得で
居ると云ふなるたはれ女』と
言の葉も荒ひ勝ち
胸の怒りに戰々と

身は震ひつゝ息吹さへ
迫れるさまの凄まじさ。
「初野」は種々に云ひ解けど

東吾の胸は晴れやらじ
『芳江も手紙を三度まで
出せしそれの返事さへ
あらざるのみか我が身より
二度手紙を送りしに
その返事さへあらなくて
我が身君が宿、訪問ぬれど
留守とばかりの侮辱
われに與へし君なれば

會ふ事さへもいとはしや
早や歸られと迫りては
醉ひし眼に光增す。
「初野」は尙も解んとて
種々に言葉を綾なせば
東吾は怒り增るのみ
今は術さへあらなくに
さらばとばかり言ひなして
はらゝ涙は袖濕し

憂に閉ぢる胸の中
如何に苦しき苦痛かや
出で行く姿見送りて

東吾は默然種々の
思ひに胸の搔き亂る
軈ての程に物音の
たゞならぬにぞ出て行けば
あはれ「初野」は梯子より
滑り落ちてや打ち倒れ

氣絶えたりし態なるに
東吾驚き搔き抱き
劬はり掛くる程もなく
清しき眼開きては
『東吾の君よ許して』と
東吾の手をば握りてぞ
果は涙に泣き伏しぬ

一七 自炊

人足繁き大通り
遠くはなれし町端れ
こゝ駒込の片ほとり
田、畑、木立の眺め佳く
うち開けたる一室をば
己が住居と姉妹は
今日移轉來し夕まぐれ

「初野」は一人過し方や
行末思ふ胸の中
折しも門に轟ける
轍の音の響きつゝ
誰ぞ來賓の來りけり
立ちて迎ふる彼方より
花の裝のその人は
『初野の君……』と呼ひなして
寄り添ふ人や芳江なる

『芳江の君』と嬉しさの
胸に滿ては言葉なし

あゝ懷かしのわが友よ
彼の衝突ありし其の後は
交情絶えし間柄なれど
三浦の君が盡力にて
うちとけたりし君と我
今日のあたり會見ては

だゝ何となう口籠りて
言葉さへも澁り勝
見上ぐる眼潤ほひぬ
狹き一室を見廻して
芳江は『初野君、如何なれば
かゝる住居を撰ばれし
出費は私が身が出ださんに
清き下宿にと移轉られよ
自炊なさんは學ぶ身に

繁雑ひ多き事ならめ。
變らぬ友が深情
此處と決ては夏迄の
たゞ二月の間ゆゑ
些少の苦勞ひ厭はしな
「初野」は涙そと拭う

『君よ病のある身には
かゝる住居は惡からめ
東吾の力を借なんに

住居變へよ』と强るなる。
芳江が言葉は東吾と
一昨會ひしそれさへも
未だ知らぬけの態なるよ
我が移轉も東吾の
心解れの故なれば

殿井の君に波子の
うけてし厚情それさへも
暇をとらして伴ひて

殿井の君と我が身との
清き間柄をば知らさんの
だゞ東吾の爲なるよ。

「初野」はそをば云はんかと
躊躇ふ胸やいかならん
『初野の君よかほとまで
君を思ふのわが心
いかなればそを辭ふか』と
芳江は今の友の身の

窮境見てはその胸の
張り裂くばかりの思ひかな。
『芳江よ、さらば深情を
受けん』とばかり打ち伏して
涙はしとゝ袖濕し
芳江も共に貰ひ泣き

かくて芳江はまた來んと
またの會ふ瀨を契りつゝ
歸るを初野見送りて

出る彼方の木下蔭
制服姿、東吾に
面影似たるその人の

何故か彼方に歩みゆく
芳江はそれと知らぬ氣の
幸あれとの言葉を
殘し姿は見えず
たゞ夕風のそよ〳〵と
青葉の枝をならすのみ。

一八　義理

芳江を見送りかへり來る
「初野」の姿見るからに
東吾は優し言の葉に
住居は此、處かと室に入る
「初野」は君よ房州にと
旅行し事と思ひしに
未だ行きまさぬかとばかり

頰は紅の色添へぬ
脚氣を病る君の身に
かゝる住居は障らじや』
かくて取り出ず紙幣の束
『苦學の資にせられかし
足らずは助力さんに
言ひ越されよ』と優心
受けて良きかに迷ひては
芳江なる君の許嫁

我に同情をよせられし
深き情にあるなれど
芳江の知らざる此の紙幣を
もし受けもせば芳江君と
我との間柄は惡からめ
『深情はうれたしよ
さはれ此の紙幣うけ得じな
納め給へ』と辭みしを

東吾は尙も强るなる
『君よ受けませ辭じな
未だ書生の我れなれば
かくなす事の禮ならじ
さはれ姉妹の今の窮境
救けんとての我が寸志』

「初野」は尙も辭みては
『君よ心に掛け給な』
東吾は『さらばかほど迄

辭み給ふは何が爲か
我れは今までわが爲めに
君は此の家に移轉しと
思ひてありし程なるに
なとさは辭み給ふにや
君か心の如何なると
手はおのゝきて堪へ難き
怒りに胸は燃ゆる哉
かくて東吾は座をたちて

紙幣の束をば懷中に
足音荒らに出で行きぬ
「初野」は袖をとらへんの
跡を追はんとせしかども
痳痺脚の立ち難く
打ち倒れては泣き伏しぬ

一九 露現

六十路あまりの年老ひし
父、元信は怒りつゝ
『などさは隱す事やある
已に露現たる事情を』……
東吾は聲も荒みつゝ
『なにを隱すと云ひますか
身に知らざるをかほどまで

訊はるゝ事の苦しさよ』
『尙もかくすと汝はなすか
言ひよ』とばかり怒聲。
『貴方とばかり言ひさして
夫を宥めて子を思ふ
母の慈受ぞうれた、
かくて東吾を催促して
彼方の一室に伴ひぬ。
如何に東吾よ汝が爲めに

子爵の君は恩人
そを思はじにひたすらに
知らぬとばかり言ひなすか』
母は涙のやさ聲に
東吾はそれを聞くからに
度胸をや据ゑて
「初野の君がその爲めに
房州に行かじ、それのみか

高利の金を二度までも
借りて彼の女を救助けんと
『初野の君は我が慕ふ
戀人なり』と言葉さへ
荒み勝ちにも言ひ放つ。

二〇　まよひ

鏡に寫る己が面
日毎に憔悴哀れさよ
胸の頑悶や、貧しさに
此の後いかに過さんの
己が樣より目に影る
妹波子の面窶れ。
色も艶をも消え失せて

頬さへ痩の見ゆる哉
など思ひては何なう
心細さや、哀しさの
湧立つ胸の裂くばかり。
斯く思ひては姉妹の身
恥忍ひては故郷に
歸りて兄の御惠みを
得んか、そもまた己が身を
寧ろ男に肌許し

此の苦しみをのがれんか
とばかり迷ふ胸のうち
迷ひの雲の消え去りて
希望の光閃めくよ。
業卒ふ秋は世に出て
立身、名譽、幸福は
思ふ儘なる我身なる
如何に可弱き女とて

世の荒波を漕きなして
此處迄來にし今なるを
彼方花咲く岸近し
假や病の重るとも
業卒へんまでのその日まで
地を嚙むともいかでかは
倒るゝことのあらざらめ。
など思ひては種々の
胸に光の閃きて

芳江の君が過る日に
今窮境より救はんと
優し言葉に誓して
行きにしものをなとてかく
悶らふ事のなきものを
あゝ我友よ芳江君
君の同情に依るのみと
胸に問ひては答ふのみ
妹の波子は姉の樣子

日毎病の重り行き
醫師に行かん金盡きて
療治怠たる此頃の
灯す油の金さへも
事欲く今日の樣なるに
此の後如何に過さんと
少き胸を痛めては
涙に袖をぬらすのみ。
涙ながらに妹は

『やよ姉上、よ此の後を
如何に過させ給ふかや
僅かの金に事缺きて
此の樣なるに……』と聞姉は
胸も張り裂く思ひにて。
『配慮う事のなきものを
芳江の君がみなさけを
うけんと言ひてうち咽び
暫し姉妹は言葉なし。

だゞ夕風のそよ〳〵と
庭の梢にわたるのみ。
かくての程に彼方より
靴音のして訪問の
殿井の姿近きぬ
あわやと初野驚ろきて
『落魄様の見られなば
恥かし』とばかり裏口に
急ぎ姿を隠しけり。

それと殿井は知らぬ氣に
笑顔に迎ふ妹に
いとやさ聲に『初野は
如何に……と』問ふを妹は
『今し出し』と恭一の
顔の色をばうかがひぬ。
「初野」は足音静かに
家の後に忍びては
窓に近くも耳澄し

立聞きなせば種々に。
殿井はいとも情こめし
言葉に波子をいたはりて
今の窮境より救はんの
尙かにかくと姉妹の
身を思ひての同情

聞きし「初野」は今更に
君の救をうけんかと
襟正しては遇なんと

表の方に歩を運ぶ。
行かんとすれば彼方にも
誰ぞや佇立み立聞きの
人の樣に驚ろきて
見れば彼方も驚ろきの
『東吾の君か』『初野君』
二人寄り添ふおのゝきや
軈て二人は彼方なる
木立の蔭に添ひ行きぬ

はやたそがるゝ日の光り
木の葉、草の葉、輝やかし
夕をさそふそよ風は
緩く吹きては裾亂す。
窶れし樣の初野をば
東吾見るから驚ろきの

『顏色とても常ならじ
病如何にとみまもりぬ
「初野」はわれと我が姿

身窄しさに俯向きぬ
『病ひの爲にと言ひさして
『君房州にたゝれしと
思へしものをとばかりなり
東吾は默し言の葉も
頓にはそれと口籠りぬ。
かくて二人は種々の
語らひなして木下陰
手をとり合ひて親しげに

歩み行く身の胸と胸
如何に血潮の湧き立つや。
軈て東吾は『初野君』
君は我身が引き受けん
如何にや君』と握る手の
なぜか知らねど打顫ふ

「初野」は顔に紅さして
『……我身は君か御情の
いとうれたしと思へども

芳江の君は如何にせん……』
いと顫るひつゝ少聲に
云ひて俯向く振の佳さ。

『……芳江はわれと許嫁
約はあれども……破らん……』と
取り出したる紙入を
伏紗のまゝに初野が手に
強ひては『……君よ受けませな
外日の君が過失の

入院料もわれ……』と言ひさして

『……君よ……われは日頃より
君を戀しう思ひたり
……戀に心も亂るゝ』と
胸に「初野」を引き寄せて
接吻しては戀幸の
いとながかれと搔抱く。

二　戀がたり

松影闇の草叢に
打倒れたる女をば
巡査は片手に抱起し
『如何にせしかよ病ひか』と
角燈にそれと照しけり
美し顔力なく
低俯れつゝも纖細手を

地に支へては身を起し
『脚を病む身の苦しさに
堪へて暫しを草叢に
身を置きたれど今はは
その苦しさもうすらぎて
使にやりし車夫も
歸らん刻』と語へぬ
彼方に提灯振りつゝも
車夫は駈け來て『初野君』

呼びて手をば捉りにけり
巡査は『汝が乘せ來しか
よく介抱れと云ひさして
彼方に足音消え行きぬ。
「初野」は車夫に『彼の君は
如何に』と問ふに『されば
東吾の君に途上
會ひて此力に伴ひぬ』

言ひて指さす木下影
「初野」は走り袖捉りて
『君と』はかりに寄り添ひぬ。
かくて二人は車をば
打連ねては「初野」なる
住居に近く下車して
堅く手と手を握りつゝ
語ふ胸の轟きや。
「初野」は『君よ聞ませな

芳江の君は、君の身を
思ひて胸も裂くばかり
悶えて泣きてあるものを
故は知らねど芳江君と
離婚んことの東吾が胸
聞くたべとの願みなる』
東吾はたゝに打笑みて
默して言葉なかりけり
「初野」は取り出す紙入を

東吾手に取り
『君よ中なる紙幣の束
とり給ひしか、何になれば
君はかくまて辭まるゝ
君はわが身を嫌はれて
辭みてうけじそれのみか
口にし得じてかにかくと
芳江の事をのたまふか
あゝ誤まてり、愚かさの

わが心か』と叫びては
暫し俯向き涙ぐむ。
「初野」は胸も裂ばかり
苦し思ひにそと拭う
『さは君思ひ給はじな
われとて君を思ひては
戀に心も悶えつゝ
今は炎に燃るかと
胸の血潮は湧き立つよ』

『さらば我がこの思ひは
許し給うが「初野」君』

『……わが身は君に任すのみ……』

東吾は初野を搔き抱き
初野は戀に醉ふばかり
かくては交す接吻よ。

二三　隱れ家

緋雲亂れて蒸あつき
夏の夕ぞ靜なる
木立繁れる本堂の
擔下めくる扇骨垣
荒れたる庭は廣けれど
築山の楓や瀧壺の石
眺めすぐれし涼しさよ

飛石傳へ靜かにも
流行の矢絣の單衣に
海老茶の袴穿なして
人は羨む綠髪
花の面に化粧して

見あぐるばかり艶麗に
姿體なせし花の人。
庫裏の彼方に聲のして
足音荒くも出來しは

眉秀でたる青年は
椽に佇立む艶麗の
「初野」の姿見るからに
『初野の君』と寄り添ひぬ
「初野」はそれと優さ聲に
『君と別れし其夕
波子は殿井に救をば
受よと云ひて强ふなるに

二言三言爭ひて
果は戸外に出せしに
殿井の君がもとに行き
君とわれとの情事
語りしか
島井の主婦訪ね來て。

情つくせしそれのみか
われと殿井結ばんの
種々に心をつくしたり

若し殿井に我が身をば
委せぬ事もあるならば
君とわれとの戀中を
世に露さんの言の葉よ
さはれ如何なる名はたつも
主婦が難題うけられし
拒絶たりと』打語る
『清き二人の戀なるを
如何なる噂たつとても

われはいとはし「初野」の君……
……波の君も暫らくは
歸り來まさぬ心かや
さらば業卒ふそれまでの
僅か三月の間をば
その儘になし置かれよ』と
聞きし「初野」は女氣の
脆き涙に胸はとづ
『さらばよわれは歸らん』と

東吾はそれを聞くからに
『初野の君よ其の邊り
われは送りてまゐらせん』
二人連れだち歩み行く。
夕陽目映く空晴れて
袂を弄る戰風の
寄り添ふ袖をからませて
梢に蟬の聲高し
杉の林を出でぬれば

彼方日輝は鮮かに
楢の葉裏のうつくしさ。
歩む足並の寛うして
東吾は胸の悶ひに
深き憂に頸垂れて
物思もはしき振なるに
「初野」は『君よ何思ふ
君とわれとの中にして
隱そふ事のなきものを。

我は言はねど此の日頃
故は知らねど酒召して
荒さめる胸を鎭めんの
振りを今日しも垣間見し
君よ憂を語れよ』と
東吾の手をば握るなる。
聞くだに胸をとゝろかせ
强ひても笑をつくりては
『君に聞さは憂うるに

われは強ひても默したり
さらはよ聞けよ『初野君』
東吾はかくて語る。
『芳江とわれと離縁と
友なる君にたのみてぞ
離縁の請求せしなるに
頑にして許さじ
たゝそれのみか
芳江の兩親はわか友に

わが心をもかへさんと
種々にたのみてあるものを……』
言ひて東吾は苦笑のみ

『さらは宿所も知らさじや』
『さなり此の事終局迄
宿所は秘して語じよ』
『芳江の君はその胸も
裂くかとばかり君か身を
思ひてこそはあるものを

そを思ひては君と我
語ひせしは罪なるよ』
『君と我との語ひを』
破りて芳江を思ふか』と
東吾の眼かゝやきぬ。
『否、語ひは破らねと
たゝ友の身を思ふのみ
我は生命も抛ちて
君を戀ふてあるものを』

『さらは如何になり行くも
二人か情交は變らざれ』
『さなり』と血潮湧きたてる
握る手と手のあたゝかき

二三　家出

夕霧籠したそかれの
青田に渡る風すゞし
言ひ交しては別れ行く
後姿を見送りて
東吾の嬉し言の葉を
「初野」は胸に繰返し
病る歩みも徐やかに

我が家の門に辿りしは
はや夜の帳たれこめて
彼方、此方に燈火の
光りほのめく頃なりし
「初野」は見やるわが室の
火影も紅く光射し
誰そや待つなる氣色にぞ
訝かりつゝも入りぬれば。
音に彼方のその人は

『初野の君』と取りすがり
涙は雨と袖ぬらす

不意を打たれて驚ろきの
暫しは口も利き得じな。
『芳江の君か如何にせし』
言ひて「初野」は座に就きぬ
『義姉よわれは家出して
來し』とばかりに泣き伏しぬ

かくて涙の言の葉に
初野よと云ひて語たる
『如何なる事か知らねども
夫ともたのむ東吾は
われとの中を離れんと
請求來にしよそれのみか
母はわれに計じて
某伯爵家より養子をば
婚はさんとて强ますに

胸は張裂くばかりなる
其の苦しさに堪へやらで
家をひそかにぬけ來しよ
たゞ一度を東吾に
會ふて意、中も聞かなんに
「初野」の君よそれまてを
我が身を隱し給はれ』と
われを忘れて泣き伏しぬ。
語らふうちに彼方なる

門に數人の聲のして
捜さん人の來しなるに
芳江は詮方あらなくに
押入にこそ身をかくす
來にし「芳江」の垂乳根は
言葉も優さに『初野君
今し芳江は來まさじや』
問ふ言の葉も身に染みて
「初野」は顏の色かへぬ。

『芳江の君は來まさじな』
『さらばよ君よ此の近邊
芳江の友はあらしや』と
眼見張りて室の内
彼方、此方と見渡しぬ。
『友なる家も我は知らず』
『さらば此の後君が家に
若しや芳江の來もなさば
家に歸して給はれと

云ひ殘しては出て行きぬ
芳江は眼泣き張らし
轉ぶが如く走り出で
母の姿をながめつゝ
『あゝ母上よ許して』と
姿亂して泣き伏しぬ。

二四　悪夢

胸の惱みに眼られて
うつら〳〵の夢心地
東吾と二人手を取りて
闇の隧道をば逃げ行けば
軈ては狹き穴の底
行かんとすれば道は閉ぢ
如何にすべきにうちまどふ

遙か上より芳江君
綱を垂げてしに東吾君
それにすがりて救はれぬ。
東吾の君と聲限り
高く呼びてある程に

今度は太き綱垂れて
救はんとする人見れば
殿井や。夏本子爵なり
孰れも厭はしき君なれど

詮方なくに取り絶り
救ひを得んと思ひしに
綱は細りて絶ち切れぬ
啊娜や身體は落にけり
落しにわれと驚けば
朝の床の夢覺ぬ
胸の動氣の烈しくて
冷汗に總身はぬれにけり。

二五 立聞

夢を見しより惱ひは
いとゞ愈りし胸の中
芳江の君に東吾の
住居明して知らさんか
東吾の君に芳江が胸
打語らんかと迷ふては。
否、否住居明しなば

芳江の君は尋ね行き
東吾の君と解けかゝる
縁の糸を結ばれん
かくて我身は東吾に
疎まるは理よ

さはれ東吾、過る夜に
われと誓ひし言葉は
如何なる事のありぞとも
うちくたかるゝ憂はなし

斯く思ひては己が身の
戀幸にこそほゝゑまる。

「初野」は胸に樣々の
空想描かきたそがれを
東吾が住居訪ねんと
重き脚をば歩みつゝ
胸の動氣を堪へては。
歩み徐かに辿り行く

行けば住居の門の邊に
數多の楫をそろへてぞ
人待ち顔の東夫の樣
若しや東吾への來賓に
あらじやなどゝ思ひては
「初野」は胸を轟らせぬ。

裏庭傳へ其の室に
近き行けば燈火さゝ
常にはあらじ輝やきて

數多の人の聲すなり
「初野」は心地亂れつゝ
擔に佇み立聞けば
東吾の君の父母や
芳江の君が垂亂根は
友の家出やかくと
涙ながらに語り
汝れが望みを得させんに
芳江と緣結べとて

三人は強ひて止ざるに。
東吾はさらば結ばんと
言ひしに「初野」驚ろきて
われとわが身を忘れては
おどり入らんとせしかども
胸の怒りを押し鎮め
涙ながらに倒れ伏す。
尚も如何にと悲みの
聲を靜かに寄り聞けば

東吾は聲も明晰に
初野の君と誓へしも
たゝ言葉の上なれば
今後は誓を破らんに
心安くおはしてよ
語る言葉に濁りなし。
そを聞き我れも安ひぬと
芳江の母は啜泣く
さらは如何なる事あるも

その言葉の偽りは
無しと云ふなる汝が胸を
芳江や聞かば嬉しさに
夢かと思ひ迷ふらん。
此方に立聞胸の中
如何に惱みの增やらん

暫し起き得て泣き居たり
君と添はじは添はれじは
生きて甲斐なき我身かな

「初野」は一人悶躁きては
絶んばかりに泣き倒れ
涙はしとゞ袖ぬらす

二六 怨恨

怒は胸を劈きて
抑へ難さに蹌跟きて
歩むとすれば倒れ伏し
胸の動氣の烈しくて
迫れる息の凄ましき。
軈て辛くも起あがり
髪振り亂し口憎さに

眼の光りもの凄く
齒を喰ひしはる面ばせは
色も失せては青白し。
あゝ薄僥の我身かな
思ひし人は他人と

夫婦の契り結ばんの
われをすてゝは嘲笑ふ
あゝ口憎し腹立し
清き君ぞと思ひしに

わか感情をば弄そぶ
たはれ男、汝と今までを
思はざりしよ誤まてり。
あゝ此の上は彼の二人
心のまゝにわか怨恨
晴し呉んよ晴さんと
彼方見張れば芳江は
窓に顔を出しては

彼方、此方を眺なる。
「初野」は胸に思ひつゝ
歩むとすれど倒れ伏す
起き上りては打ちたふれ
倒れ伏しては起き上る
胸の動氣の烈しさよ

二七　策略

苦しき胸を押へては
摩痺、足を歩みつゝ
己が家路に辿り行く
彼方に芳江は小走りに
歩み行くにぞ聲高に
『芳江の君』と呼びしに
歩み返して『初野君

今し君が家訪はんとの
途上よ』と答ふ優聲や。
『芳江よ東吾、東京をば
旅行れしよ芳江君
君行きませ』と強るなる
「初野の言葉聞くからに
僞りなりと知らぬ身は
『さらばよ行かん房州にと』
『行きませ行きて東吾に

會ふて意、中を聞れかし
東吾の君も芳江行かは
離縁ん心も薄らきて
解けし紅糸、白糸の
結すはんとし思ふなる』
「初野は芳江に罪なきも
東京にありては東吾と
夫婦の契りもなさんかと
芳江を偽り房州にと

旅行せんの心なる。
『さらば「初野」明朝
瀧船に乗りてぞ旅行ん
身をいたはりて給へかし
縁むすびてかへり來て
「初野」は病を癒えもせば
幸は一時にあふれん』と
胸に希望を描がきては
果は涙に呉るのみ

「初野」もともに故もなう
たゞかなしさに泣にけり

二八 出發

使者がもたらせし
芳江の玉章を
取る手遲しと讀み行けば。

亂れ亂るゝわが心
押し鎭めつゝ思考へは
今回はわれの一生の
生死極まる處なり

徒に悲しみ沈む可き
場合にあらずと思ひしよ
されば是より義姉の
御意、見にこそしたがへて
今朝房州にと旅立たん。
斯くわれ決心ては
馴れぬ舟路も淋しとは
露思はずよ義姉よ
あゝわが胸中を推察てよ
房州にと着きしとて

堅き心の東吾は
されと結びも解けまさじ
さはれ一度會ひし上
わが胸の中語らひて
かくての後に快諾ずば
われは此の世にあらぬ身よ。
あゝ義姉よそを聞ば
あはれと思し給へてよ
今後東吾に會ふ事も
あらは君よりわが胸中を

語り傳へて給へかし。

東吾ならぬ他男と

妹背の契せん事の

心苦しよ義姉よ

あゝいざゝらばさらば君

これが別れとなりもせば

君よあはれと思ふてと

讀む手戰々震ひつゝ

あゝ道ならぬわが心

罪なき君を僞りて

もしも房州に行きもせば

如何にすべきとうち惑ふ

立ち上りては病む脚の

麻痺蹌踉き柱にて

身を支へては力無う

轉ぶが如く倒れ伏す。

斯なすうちも束の間と

車を急し停船場に

飛が如くに走らせぬ。

二九 卒倒

あなや芳江は乘船とて
棧橋近く歩みしに
飛が如くに走り來し
「初野」は身をば轉ぶごと
芳江の君と抱き付きぬ。
身は戰々と打ち顫へ
呼吸も絶ゆかと喘ませて

顔の色さへ青くして
打倒れてぞ泣き伏しぬ
『おゝ義姉か如何にせし』
『あゝ我心誤てり
君よ許しませ東吾は
房州にあるは僞りよ
然も東京の田畑なる
寺の一室にましますよ』
言ひて初野は倒れたり。

『心静めよ義姉よ……
……誰そや手を貸し給へかし

芳江は「初野」介抱りて
水を與へて種々に
心痛めてある程に
初野は『苦し苦し』とて
身を悶躁きては叫びつゝ
今し臨終ばかりなり。

三一　手と手

茲病院の一室なる
寢臺の上に横たはる
「初野」は動氣烈しくて
『苦し、苦し』と悶躁きては
人心地無く叫ばひぬ。
種々に手當を與へども
全く危篤に陥りぬ。

芳江は「初野」が手を握りて
言葉もなくて涙くむ
「初野」は脈も絶えぐに
爪の色さへ黒ずみて
手足冷たくなりにけり。

泉と涙溢れては
見えぬ眼を視開きて
『芳江の君よ、宥してよ……
宥し給へよ……芳江君』

愈よ悶へて叫ぶのみ。
『あゝ「初野」よ、「初野」よ
心やすけくおはしてよ』
芳江は涙に口籠りぬ
静かに扉をば押し開き
來にしは誰ぞと……。
芳江は顔に紅さしぬ
入り來し人も見るからに

ともに涙に暮るのみ

「初野」は眼闇くして

其前に立つ姿をば

誰ぞと見分けもつかぬかな

『東吾の君は來ましたじや』

悶躁きて呼ぶ苦しさよ

『初野の君よ……東吾は

先刻より茲に居ましたり』

初野聞くから眼を据ゑぬ。

『初野君よ東吾よ

聲を聞きては東吾君……

芳江の君と呼びては

二人の手をば胸の上に

握り合せて東吾君……

芳江の君よ末ながく

間睦ましく暮してよ』

言ひて言葉は絶え〳〵に

呼吹をも絶えて終焉ぬ。

魔風戀風之詩 終

明治三十九年十月廿五日印刷
明治三十九年十月廿八日發行

＊＊＊＊＊＊
＊不許複製＊
＊＊＊＊＊＊

（定價金四十五錢）

著作者　菊池曉汀
東京市下谷區上野西黑門町拾四番地

發行者　臼井三郎
東京市日本橋區箔屋町十四番地

印刷人　椎名信太郎
東京市日本橋區箔屋町十五番地

印刷所　丸山舍印刷所

發行所　東京市下谷區上野西黑門町拾四番地　盛光堂

外記